

第291回『生と死を語る会』1月例会のお知らせ

『小説「安楽死特区」(長尾和宏)を読む』

————— 尊厳死と安楽死の違いとは —————

昨年暮れ、ミステリー小説『安楽死特区』がブックマン社より刊行された。1400円
著者の長尾和宏氏は尼崎にてクリニックを開業されている内科医師で、日本尊厳死協会の
副理事長も務められている。『平穏死10の条件』『痛い在宅医』『痛くない死に方』など話題
作を次々と発表し、今やテレビの露出度も上昇中である。そして今回、小説家デビューした。

今月の例会に長尾先生に来ていただくのは不可能であるが、せめて『安楽死特区』の読書
会および長尾先生の講演ビデオを上映する予定である。

忙しい会員のために、本のあらすじを紹介してみたい。(ミステリー小説なので程々に)
東京オリンピックも終わり、景気の谷に入っている2024年の東京。政府部内では超高齢社
会への対策として「安楽死特区」構想が持ち上がっていた。国家は、社会保障費で国が潰れ
そうだから、国民皆保険は維持しつつ切り抜けるための秘策として、長生きしたくない人に
早く死んでもらったほうがいいのではないか、そのための実験として、「安楽死特区」を作
ろうとしているのだ。その第一号に女流作家の澤井真子に白羽の矢が立った。この女性
のモデルは、どうも橋田壽賀子らしい。中等度のアルツハイマー型認知症と診断されている。
もう一人、安楽死第一号を狙う女性は、池端貴子。前都知事で、次の孤独担当相に内定して
いる。どこか小池百合子を彷彿とさせる人物である。子宮がんのステージ4と診断されてい
る。彼女も安楽死特区のマンションに入居予定である。他に、多発性硬化症と診断された薬
剤師の酒匂章太郎。歌舞伎町の熟年ホストで、膵がんのステージ4の鯨井正平、そして彼ら
を取り巻く医師集団。

遂に安楽死特区での初めての安楽死実施の日がやって来た。ところが、事態は、誰もが予
想していなかった方向へ……澤井真子は死ねなかった。認知症を理由にした安楽死は未
だ霧の中にある。「やすらぎの森」という別の試みがスタートした。

がん患者さんに対して、安楽死は能動的に死を選択するものであるとする。他方、認知症
患者さんに、受動的な、つまり自然に訪れる死が、いかに苦痛を伴わずに逝くことができ
るか、尊厳ある死を実現するものであるかを実証すること、それが「やすらぎの森」であると。

~~~~~  
自己決定権に基づく、自分の最期を考える上で本書は非常に示唆に富む。医学的・社会的  
に博覧強記の長尾先生にはマイッタ・マイッタ!!

ストーリーを追うだけの本ではない。

特に、安楽死と尊厳死の違いを学んでゆくと、色々なものが見えてくる。

是非とも、ご一読願います。

---

『生と死を語る会』1月例会 2020年1月16日(第三木曜日)午後7~9時 貴志川  
生涯学習センター2階 学習室3・4 参加費無料 問合せ先 坂口 0736-64-7801

---